

命を育む体験を積み重ねていくために

澤 田 愛 子

1. はじめに

私は授業を通して、学生達に現場での実践を伝えていくことが、使命だと思って5年間過ごしてきた。今年度教職実践演習のフィールドワークを体験した学生が、グループワークでの学びに「自然に触れる環境と命の大切さを育む教育」を記載していた。そこで、“命を育む体験を積み重ねていくために”の実践の一部を最後に伝えたい。

神戸市立御影幼稚園での平成23年度がスタートし、研究テーマを全教職員で話し合った。3月11日には、東日本大震災が発生し、約2万人にも及ぶ死者・行方不明者を出す未曾有の大災害となり、命の尊さを改めて実感した。平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災で園舎が全壊し、当時園児2名を亡くすという大きな被害を受けた幼稚園としては、今、何ができるのか、何をしなければならないのかを問い続け、「命の大切さを子ども達に伝えたい」という意見が真っ先に出た。4歳児、5歳児の“命”に対する思いとは…。まず、そのことを教師が理解するとともに、教師が言葉で「命を大切にしましょう」と子どもに伝えるだけでなく、日々の遊びや生活の中から“命を大切にする”ことの本当の意味を子ども達自身が感じ取ってほしいと思い、教員と共に事例検証しながら取り組んだ。

2. 実践事例及び読み取りと教師の願い

(1)「生き返ることもあるよ」 4歳児 6月

クラスで飼育していたザリガニが死んでしまった。「かわいそうに…」「どうして死んでしまったんだろう？」と話しながら、みんなで死んだザリガニを出し、お墓をつくったり、汚れた水槽を洗って水替えをしたりする。クラス全員でザリガニの死について話し合うと、「病気になったのかな?」「水が汚れていたのかな?」と、子ども達なりにその理由について考え始めた。子ども達の思いを受け止めながら、「死んでしまったら、もう友達とも遊べないし、おいしいご飯も食べられないし、かわいそうだね」と、再度、死んでしまうことの悲しさと命の大切さを教師が伝える。すると、B児は「生き返ることもあるよ」と言い、C児は「お薬あげたら治るかも…」と言う。それを聞いたD児は、「死んだら、もう戻ってこないで」と反論する。

神妙な顔で、死んでしまったザリガニのお墓をつくったり、水槽の水替えをしたりする子ども達の姿から、4歳児なりに死んでしまったザリガニに思いを寄せ、なぜ死んでしまったのかを考えている様子が伺える。しかし、一方で「生き返ることもあるよ」というB児のように、まだ、本当の意味での“死”というものを理解できない子どもの姿も見られる。実際に“死”と向き合う経験を積み重ねていく中で、少しずつ“死”とはどういうことなのか、“命”がどれだけ大切かを感じ取れるようになっていくのではないかな。

(2)「ドングリって生きているねんで！」 5歳児 11月

近隣の神社へドングリ拾いに行く。「赤ちゃんドングリ見付けた！」「葉っぱの下にかくれんぼしているの、見付けた！」と、子ども達は見付けたドングリを嬉しそうにビニル袋に入れて、幼稚園まで持って帰ってきた。保育室で、それぞれが拾ってきたドングリをビニル袋から出して見せ合ったり、自分でお気に入りの容器に移し替えたりしていると、I児が「見て！曇っている！」と蒸気で曇ったビニル袋を手を教師の所へやってくる。「本当だ。不思議だね」と教師が言うと、そばにいたJ児が「そうや！だってドングルは生きているねんで！」と得意気に言う。「なんで？」と、周りにいた子ども達が不思議そうにJ児に尋ねると、「だって、ドングリは息してるねん。ハァーって息したら曇るでしょ？」とJ児が答え、周りの子ども達も納得する。

友達の名前を呼ぶように、見付けたドングリに「赤ちゃんドングリ」「双子ドングリ」と名前を付け、子ども達は親しみをもってドングリに触れている。「葉っぱの下にかくれんぼしている」という言葉からも、ドングリを自分達の生活と重ね合わせながら見付けていることが分かる。しかし、「ドングリは生きている」というJ児の言葉は、周りの子ども達にとってよく理解できなかったようだ。J児の「ハァーって息したら曇るでしょ？」という言葉で、自分達もビニル袋や窓ガラスに息を吐き、曇らせたことがあることを思い出し、納得したようだ。自分の生活や経験したことを重ね合わせることで、植物も生きているということに気付き、また、自分達も生きているということを再認識するのだろう。こうした経験を繰り返しながら、子ども達は“命”のことを少しずつ理解していくのではないだろうか。

3. おわりに

子どもは、様々な生き物や植物と触れ合う中で、“命”を実感していく。保育現場では、子どもの心が動く体験を積み重ねていくことができるような環境をつくっていくことが重要である。また、環境は存在するだけでは子どもの心には届かない。子どもが環境にかかわり、何かを感じることで初めて生きた環境となっていくことを教師はしっかりと理解し、環境の構成をしていくことが大切である。

子ども一人一人が、“命”をどのように理解していくかを読み取っていくことはとても難しい。保育現場の様々な場面において、子どもが“命”についてじっくりと考える機会をもつこと

が必要である。教師が子どもの気付きやつぶやきを丁寧に受け止め、その都度子どもに返していくことが、子どもの“命”に対する思いや理解を深めていく場となり、子どもの心に積み重なっていくのではないだろうか。

幼児期から“命”の大切さを知ったり、“命”あるものを大切にしたりすることは、生きることのすばらしさに気付くことでもある。

最後になりましたが、教職員・学生の皆様に、心から感謝を申し上げます。